慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 理論と実践 : 最近イギリスにおける経済学方法論論争 |
| Sub Title | |
| Author | 野村, 兼太郎 |
| Publisher | 慶應義塾理財学会 |
| Publication year | 1939 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.33, No.8 (1939. 8) ,p.999(1)- 1031(33) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19390801-0001 |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19390801-0001 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 一橋論叢

東京商科大學一橋論叢編輯所

第四卷　第二號

昭和十四年八月



獨逸爲替管理法……常盤敏太

ナチス人口政策の五ケ年……森田優三

指導者原理の意義と其歴史的背景…町田實秀

學界展望

獨逸に於ける私法理論の轉回……吾妻光俊

書評

ハチスン『經濟理論の意義と基礎要請』…(山田雄三)

小林太市郎『支那思想とフランス』……(增田四郎)

新明正道『社會學の基礎問題』……(佐々木專三郎)

大橋光雄『有限會社法』……(吉永榮助)

東京商科大學附屬圖書館月報



東京市神田區一ツ橋二ノ三　岩波書店　定價五十錢　送料一錢五厘

振替東京二六二四〇



三田學會雜誌　第三十三卷　第八號


# 理論と實踐

## ——最近イギリスにおける經濟學方法論論爭——


野村兼太郎


### 一

數年來經濟學における實踐性が問題とされ、經濟學の諸理論が現實から遠ざかり過ぎてゐるといふ批難を屢々聞くやうになつた。それらの人々はいふ。實踐に基礎を置かざる理論は何らの意義もない。所謂學問のための學問の如きは、今日の活社會において無意義である。經濟學は實踐に基づいて研究さるべきである。しかし淺薄なる實踐はいけないといふ。從つてここに「實踐」又は「現實」の意義が問題となる。學者相互に相手の議論が實踐性を缺き、現實から遠ざかつてゐるといつて攻擊する。ロバァトソン(D. H. Robertson)とキィンズ(J. M. Keynes)との論爭(Economic Journal, Vol. XLVIII, 1938)の如きがその一例である。

ここに實踐とか現實とかいふ意味に少なくとも二種あるやうである。そしてその二種のものを混淆して、一般に實踐性を缺くとか、現實から遠ざかつてゐる(remoteness of reality)とかいつて、經濟學を攻擊批難することが多いやうである。

一つは經濟學が實際の役に立たないといふことである。即ち實用的でないから價値がないと批難するのである。この意味に實踐を解するなら、今さら問題とするに當らないのである。昔から一般に學問に對する通俗的批難である。所謂淺薄なる實踐といふのはこの種のものを指すのであらう。苟も「科學」と稱せられるほどのものでこの意味の實用的なものは一つもない。家計の計算に高等數學は不必要である。少なくとも學問上實踐性といふ場合にはこの種のものであつてならないことは自明のことである。

經濟學が現實から遠ざかつてゐるとか、又は "further from real life" とかいふ時の現實といふのは單に實用といふことではない。實際生活の眞の認識に基礎を置くものでなければならないといふことである。從つてそこに一つの世界觀又は人生觀と交渉をもつことになる。この場合一つの議論が實踐性ありや否やは容易に決定し得ないことになる。又經濟學の實踐性が問題とされる場合には、その採用された方法論が主として檢討され、その方法論と現實との關係如何が問題を決定することになる。

私は今これらの基本的問題をここに檢討しようといふのではない。われわれの同好同學の間で屢ゝ議論されてゐる實踐性の問題が偶ゝ最近主としてイギリスの學界で問題とされてゐることを知り、ここにこれを紹介しこれに多少の批判を加へようと思ふだけである。元來私自身の研究は經濟史にあり、殊に多くの時間を史料の檢討に費してゐる者であるから、この種の議論の文獻を十分に涉獵して、然る後議論をする餘裕がない。從つて遺漏の多いことを免れまいと思ふ。唯平常同僚諸氏との議論に刺戟されて筆を採つたに過ぎない。この點については豫め讀者の寛恕を俟つ次第である。

## 二

英米兩國の學界でこのことが問題となつたのは極めて最近のことであるが、その萠芽はかなり古いものである。今この問題に關聯ある著書及び諸論文中、私の寓目し得たものだけを揭げつゝ、その論爭の變化を簡略に記して置く。前述したやうな理由から、私の知らぬものも澤山あらうと思ふから、御教示を願へれば幸甚である。

一九三二年にロンドン大學のロッビンス（Lionel Robbins）の "The Nature and Significance of Economic Science" の初版が出版され、英米の學界に經濟學の本質について大きな問題を提出した。ロッビンスはマァシャル(A. Marshall) その他の人々が經濟學を物質的幸福の獲得を目的とするとか、あるひはその諸原因を研究する科學であるといふのに反對し、目的を達するために必要な手段の稀少性を問題とすべきであるとし、目的そのものは經濟學の取扱ふべき範圍外であるとした。彼は前者の如き經濟學の概念を分類的（classificatory）と呼び、自己の主張する概念を分析的(analytical)と呼んだ。なほこれらの點については後に述べよう。

ロッビンスのこの著作に對して、コロンビア大學のスウタァ(R. W. Souter) 教授が一九三三年五月號の "The

Quaterly Journal of Economics" に "The Nature and Significance of Economic Science in Recent Discussion" と題してこれを反駁した。マァシャルを以つて、從來の經濟學の最高の集成者と見た彼はロッビンスの說を喜ばず、痛烈にこれを批難した。さらに彼はこの論文を擴大し、"Prolegomena to Relativity Economics: An Elementary Study in the Mechanics and Organics of an Expanding Economic Universe" なる一書を著はしたが、私は未だこの書を一見する機會を有してゐない。

スウタアの著書に對し、シカゴ大學のナイト(Frank H Knight)教授が "Economic Science in Recent Discussion" と題する一文を草して("The American Economic Review" vol. XXIV, No. 2, June, 1934)、これを詳細に批判し、何れかといへばロッビンスに同情ある言辭を爲した。以上がロッビンスの著書の初版について惹起された論爭中、私の一見し得た文獻である。勿論これ以外に多くの論文があることは明かであるが、ここではこの時の論爭を問題とするのではないから、これ以上觸れずに置く。

ロッビンスの著書は一九三五年に再版したが、その後、經濟學と現實との關係が實際問題として論ぜられるやうになると、ロッビンスの著書が屢々引用されて問題となつた。今この問題に關聯あるもので、私の一讀し得たものを擧げると次ぎの如くである。

L. M. Fraser, "Economic Thought and Langnage, A Critique of some fundamental Economic Concepts," 1937.

Barbara Wootton, "Lament for Economics," 1937,

Sir William Beveridge, "The Place of the Social Sciences in Human Knowledge" ("Politica" vol. II., No. 9, 1937.)

E. F. M. Durbin, "Methods of Research —A Plea for Co-operation in the social sciences." ("The Economic Journal, vol XLV III, No. 190, 1938)

L. M. Fraser," Economists and their Critics" (Ibid.)

R. F. Harrod, "Scope and Method of Economics" (Ibid., No. 191, 1938)

Surányi-Unger, "Facts and Ends in Economics" (Ibid., vol. XLIX, No. 193 1939)

要するにかくして最近における經濟學界の混沌たる狀態が理論と實踐との間隙から生じたのであつた。マァシャルの高弟たるピグゥ(A. C. Pigou)教授が最近 Royal Economic Society の總裁就任演說に次ぎの如くいつてゐる。

「今日の狀態はマァシャル的支配に少しも類似してゐる何ものもない。實際熱心な信徒を有つ著者はある。しかし同じく熱心な批判者を有つてゐる。マァシャルは統一の、默從の、靜寂の中心であつたのに對し、彼等は混亂の諸中心である。新入者にとつて、これは悲しむべき試錬である。彼はあまりにも早く根本問題の論爭中に飛び込まされる。彼は未だ泳ぐことも學ばないうちに、逆捲く海中に投げ込まれる。しかしより成熟せる者のためには、又經濟學自體にとつては、相爭ふ意見の衝突は、獨斷的甘睡を打破して、生命を喚起するかも知れない。混

亂の中から何か新しい、價値あるものが生ずるかも知れない。一つの混亂期、次いで第二のマァシャルと新しい綜合、――敢て豫言すれば、多くの者が今想像してゐるよりも、もつと第二のマァシャルの綜合に甚だ近いものであらう。次いで第三の混亂期、第二のマァシャルの退去？（debunking）、かくして明快な理解に向つて、不規則かも知れぬが、進歩的前進をつゞける。」（"The Economic Journal," Vol. XLIX, No. 194, June, 1939）

ピグゥ教授の將來に對する發展的豫言は暫く置き、今日の經濟學界の混亂狀態を明かにするためには、如何なる種類の議論がそこに行なはれてゐるかを明かにする必要がある。殊に上述のイギリスにおける最近の論爭の本質を明かにする上に、イギリス學界の現狀を簡單に一瞥して置かなければならない。

## 三、

ピグゥ教授もいつてゐるやうに、今日ではいくつもの中心がある。從つてこれを數種に概括することにはかなりの困難がある。假令一つの類型にはいる者でも、決して同じであるといはれることを喜ばない。事實又、各自がかなりに相違してゐるところが多い。スッタァがロッビンスをオッストリア學派の遵奉者と呼んでゐるが、恐らくロッビンスは承服しないであらう。一部に同樣な學說が取入れられてゐるからといつて、直ちにその類型に編入されることは今日の學者は多く喜ばないであらう。しかし概觀する上にいくつかに分類する必要が起る。イギリス經濟學界の潮流を大別して二つに分けてゐる者が多いから、（例へば Wootton, op. cit.; Fraser, Economic Thought, など）こゝではそれに從つて少し說明して見よう。

第一のものは經濟學を「富」とか「厚生」とかいふものに結びつけて定義するもので、第二のものは「稀少性」に關聯させるものである。フレェザァは前者を「A型」といひ、後者を「B型」と呼んでゐる。（Fraser, op. cit., p. 21）こゝでも便宜上この言葉を借用する。

A型に屬する經濟學の定義の主要なる特徵を擧げると、

（一）經濟學を人間活動の特殊「部門」に結びつける。

（二）經濟學と他の諸人文科學との間に嚴重な區別を設けない。即ち科學的精確性を要求しない。

（三）彼等は實證的である。規範的ではない。經濟學者は如何なる主題を考察すべきであるかを規定づけようとはしない。單に如何なる主題を一般に考察するかを粗雜に指摘して滿足してゐる。（Ibid., p. 29）

マァシャルの有名な經濟學の定義の如きがその代表的なものである。即ち「普通の實務的生活における人類の研究」で、「厚生に關する物質的必要物の獲得並びに使用に、最も密接に關係せる個人的及び社會的行動の部分」を研究するものとする。（"Principles of Economics," p. 1）この定義の曖昧さの中に、前記のフレェザァの指摘する諸特徵が包含されてゐる。ウットン夫人はこれを「市場」に依つて解說する。即ち市場過程を研究するものとして說明してゐる。こゝに市場過程といふのは、簡單にいへば、需要、供給及び價格の相互作用を意味する。勿論マァシャルの定義は市場經濟と呼ばれるもの以上のものを包含してゐることは明かである。ロビンソン・クルゥソォは市場へ關係しなかつたが、「厚生に關する物質的必要物の獲得及び使用」には密接な關係を有する行動をしてゐる。クルゥ

ソォのやうな特別な場合を除いても、この定義に從へば、かなり曖昧なものを包含するやうになる。例へば石炭といふ物質的必要物を採掘する勞働者が眼球震顫(nystagmus)と呼ばれてゐる特殊病に冒されたとする。その結果、炭山における勞働の供給に影響し、抗夫の賃銀、石炭の價格に影響し、市場に反映するが、マァシャルの定義に從へば、經濟的研究といふ假裝の下に、これらを純粹に醫學的見地、又は被害者及びその家族の心理的見地から說明することも出來る。(Wootton, op. cit., pp. 42-3)この種の定義が科學的嚴密性を缺くことは明かである。

かつ又「物質的必要物」とか、「厚生」とかいふ意義も明確でない。勿論その「厚生」といふ意味の中には、人間の生理的及び心理的なもののみを含むので、哲學的思索の如きは包含しないといふかも知れない。しかし人間の行動の如何なるものでも、物質的必要物をその厚生に要求しないものはないといつてよい。從つてこの種の定義に從へば、頗る廣汎なものになり、結局實際には「市場」を中心とする諸現象の分析に局限するより外にないことになる。かゝる曖昧さを厭つて、より嚴密に規定せんと欲する者がB型の定義を下すことになる。

B型の定義の特徴は次ぎの如くである。

（一）經濟學を理論的、實證的科學として樹立せんとする欲求から生じたものであり、そつ內容は一般通俗の用語例に依つて說かれず、科學的定義を必要とするものに依つて定められる。

（二）A型の定義に缺如してゐる精密性と精確性とを有してゐる。ある問題が經濟的なりや否やを直ちに演繹することが出來る。

（三）それは抽象的である。(a)人間生活のある特殊の觀點(aspect)に立つといふ點即ち特殊の具體的な部門(department)といふことには反對の立場から抽象的であり、(b)理論的であり、形式的であり、普遍的判斷に歸着するといふ意味でも抽象的である。

（四）現在の經濟學者の慣行を規定せんとしたり、又は特に「經濟的」と見做されるその研究を、一般の經濟的範圍內で、指示せんとする限りにおいては、曖昧である。

（五）上述の二つの點の何れについても、A型に作られた一般の經濟的研究の定義を打破せんとするものである。

（六）經濟學を純粹に實證的なりとするところの代表者が普通支持してゐる見解を必ずしも包含してゐない。

（七）個人の利害と社會の利害との關聯について確乎たる研究態度をもつてゐない。(L. M. Fraser, "Economic Thought," pp. 41-2)

この型の代表的論者はロッビンスやストリグル(Strigl)である。經濟學は稀少なる手段を處理する人間の行爲に依つて採られる諸形態を研究の主題とするものである。(Robbins, op. cit., p. 15)この定義に從へば、マァシャルの場合よりもその範圍は限定され、又非經濟的要素を濫りに取容れる必要のないことも明かである。經濟學はある目的を果たすために必要な手段が限定されてゐる場合、その手段の稀少性を問題とするのであるから、如何なる目的でも、目的それ自體が「經濟的」であるといふのは全然誤りだといふことになる。ある種の經濟學者間に行なはれてゐるやうに、「經濟的滿足」を論議することは經濟的分析の中心問題ではない。滿足といふことは活動の窮局的產物

として認めらるべきものである。經濟學が研究すべき活動それ自體に屬するものではない。「經濟的滿足」なるものを認め得ないとさへいへる。勿論稀少なる手段を使用し得るといふ滿足を、一般の全然主觀的要素に基礎を置く滿足と區別して考へることは出來るだらうが、この概念はさして有用なものとは思はれない。(Ibid, p. 25)かく主觀的な欲望充足を切離して考へることに依つて、確かに客觀的に觀察することが出來るやうになり、科學的であるといふことが出來る。

以上二種の型の經濟學の論爭はさらにここに經濟學方法論に關して新しき議論を惹起したのである。即ちこれら兩種の型はそのA型たるとB型たるとを問はず、何れも所謂市場經濟に關聯するものである。そして市場過程を基礎として作られた經濟學說が表面上何らかの客觀性を有するが如く感ぜられ、そこに科學性が附與さるるものとなす。即ち主觀性の强い質的性質のものを數的性質に還元し、それを基礎として精密な科學的表現を可能ならしめんとするものである。かくして經濟的諸現象を數學的表式を借りて說明する。

かつマァシャル又はウィックスチィド(Wicksteed)に依つて形成された價値學說及び均衡の概念は要するに市場變化の學說である。ある財貨の價格又は價値の變化が起れば、その財貨の需要又は供給に變化を生ずる。又逆に需要又は供給の變化は價格に影響する。「均衡」はそれに關し中心的重要性を有する概念である。近世經濟學說を均衡經濟學(equilibrium economics)と呼ぶ所以である。均衡といふのは需要、供給、價格とかいふ市場諸力の均衡をいふのである。Xの價格で賣られる供給の分量が、その價格で買はれる需要の分量と同じである時、均衡を得るといふのである。故に一部の論者はかゝる市場過程がない場合、それは無意味になるといふ。(Wootton, op. cit., p. 38)そしてこの種の理論は要するに、種〻なる市場、投資市場、金融市場、消費財の市場、勞働市場などに起つた事件の相互作用を解說することが、ピグゥ、ハイエック(Hayek)、キインズ(Keynes)など、この派の人々の主たる努力となつたのである。(Ibid, p. 41)しかしかくの如き方法が現實の諸現象を果たして十分に分析し、說明することが出來るかどうか。又實際の結果と符合し得るかどうか。もしそこに何らかの疑惑を生ずる餘地がある場合、方法論的疑問の生ずるのは蓋し止むを得ないであらう。

## 四

元來イギリスの學者は傳統的に方法論的論爭を好まない。「イギリスの著者は賢明にもこの問題(方法論)については全體として小心であつた。しかし最近これに關する思索が現れ始めた」とハロッド(R. F. Harrod)が指摘しているが如く、(“Economic Journal,” XLVIII, No. 191, p. 384)演繹歸納の論爭以來、殆どこの問題に考慮を拂つてゐなかつた。それでもなほ「所謂改革論者に對する適當な又最後の答は、『語るを止めよ、仕事をせよ、汝の方法を適用せよ。そしてもしそれが效果(プロダクティブ)あらば、汝の結果を表明し得んを』である」。(Ibid, p. 385)といふ。この答は確かに一面の眞理を含んでゐる。筆者が十數年前ケムブリッチに學んだ時、ピグウ教授から同樣の答を得たことを想起せざるを得ない。しかしそれにも拘らずロッビンスに依つて投ぜられた一石は、ここに方法論的議論を惹起したことは、それがイギリスの學界であるだけに、私には特に興味深く感ぜらるゝのである。

かつてドイツの學界において行なはれたオッストリア學派と歴史學派との論爭が一九一一年シュモラァ（Gustav Schmoller）の歸納演繹の兩方法は左右兩足の如しといふ妥協點に到達し、同時に他方マックス・ウェバァ（Max Weber）に發する沒價値論（Wertfreiheit）が新しい方法論的論爭を惹起し、歐洲大戰に及んだ。「大戰は事實この論爭を突如として終結せしめた。戰時經濟その他の緊急問題に經濟學者のすべてが專念せざるを得なかつたからである。主として、同じ理由からこの議論は大戰後も大規模に續けられなかつた。その不意に中斷された結果として、基礎問題は今なほ解決し得ない狀態にある」（Surányi-Unger, op. cit., p. 10）イギリスの場合、問題の起りはそれとは同じくない。しかし「今日の專門的經濟學者の多數が――少なくともその問題に興味を有する限り――經濟學の規範的解釋を全面的に拒否する立場に立つてゐる。この態度が、不幸にして、經濟政策の目的に對し眞面目に研究する興味を有さぬことに關係する。かるが故に、『現實から遠ざかること』になる」（Ibid）といへるスラニィ・ウンガァの解決が正しいかどうかは別問題として、イギリスにおける論爭の問題の中心が同じくこの點に存することは認められる。

ウットンはその著作において次ぎの如き批難をなしてゐる。先づ最初に「經濟學は何の役にも立たないことである。事實この不平は以下述べるより特殊の批難のすべてを包含するものである。といふのは後者は現在の經濟學說の無益さを說明するに過ぎないものだからである」（"Lament," p. 15）それから生ずる批難の第一は現在の經濟學は一般人（plain man）に解らないといふことである。勿論この批難の當を得ないことは、ウットンも認めてゐる。今日の經濟學は若しと雖もすでに專門化されてゐる。物理化學の專門論文が一般人に解らぬといつて批難さるべき筈がない。解らないのが當然である。經濟學の專門的說明がその無益性の記號と一般に認められてゐるところに問題がある。換言すれば解ることを難しくいふといふ癖があるといふのである。（Ibid., pp. 19-22）次ぎに經濟學者の意見は一致し得ないといふ批難がある。勿論この批難が經濟學說の全體に亘つてしかいふのならば、それは當つてゐない。しかしこの批難が起るのは重要な實際問題の解決について有力なる學者間に意見の一致を見ないことである。例へばある學者は、もし賃銀が安くなれば、就職（employment）は增加するだらうといふと、他の學者は就職を增大するためには、賃銀を引上げ、利率を引下ぐべきだといふ類である。（Ibid., pp. 22-31）その結果經濟學者は「現實」に無知だといふ批難が出て來る。（pp. 31-33）さらに最後に今日の經濟學は資本主義制度を擁護する議論だといふ批難を擧げてゐる。（pp. 33-4）

このウットン夫人の掲ぐる批難の大部分は特に論ずる必要のないものである。殊に第一の無用論や一般人難解論の如きは問題とならない。かつてここに掲げられた諸批難は相互に矛盾してゐる。フレェザァも指摘してゐるやうに、もし經濟學が有用でないならば、一般人に解る解らないは問題でない。もし一般人に解らせる必要があるのならば、それは經濟學が有用だといふことになる。又經濟學が現實から遊離してしまつてゐるのならば、現實の資本主義とは無關係になる。最後の二つの批難も相互排他的である。（"Economists and their Critics." p. 196）要するに幾多の批難を單に併記して見たものに過ぎないものであるから、これをここに一々論評する必要はない。唯現實から離

れてゐるといふ批難について、殊に前述した均衡理論に對して特に向けられてゐるのであるが、その點について特に述ぶる必要がある。今先づフレェザァの前掲論文の述ぶる駁論を簡單に説明しよう。

## 五

フレェザァはウットン夫人の批判の缺陷三つを指摘してゐる。第一に價値學説が事實幾多の實際問題の解決に功獻をなしたことを無視してゐる。財政問題には全然觸れてゐないし、貿易に關しては唯一度述べてゐるに過ぎない。そして徒らに資本主義とか、社會主義とかの問題に直接關係あることだけを問題としてゐる。第二に均衡分析が貨幣問題などに功績あることを指摘し、貸幣政策がその援助を拒否すべき理由なしとする。最後に現實から遠ざかれりとする問題を取扱つてゐる。ウットン夫人は經濟學者の大部分が價値學説を以つて經濟學の全體と考へてゐると思つてゐるらしいが、それは誤りである。經濟學を價値分析に限る者は無視してよいくらゐ極めて少數者である。夫人は經濟學者が具體的、實際的、現實的問題を拒否し輕蔑してゐると考へ、これを説明するのに三つの方法を以つてしてゐる。(1)純粋の價値學説の發展擴充に專念してゐる學者は必然的に他に價値ある仕事なしと考へるものだと認めさせること、(2)ロッビンス教授に問題を集中し、他の學者の多數は彼の説を支持するものと假想させること、(3)明かに經濟學を抽象的分析のみに限定しない經濟學者を例外的、否變り者（エクセントリック）に取扱ふこと。かうした方法で經濟學を現實から離れたもののみと斷定するのだが、この中第一と第三は問題でない。第二のロッビンスに關する點はやや説明を要する。(op. cit., pp. 197-9)

ロッビンス教授は先づ經濟研究の組織を改善し、明快にせんと欲して、(一)彼が中心的な經濟問題であると思考せる定義を提供し、(二)この彼の中心問題に直接關係ありと考へた經濟學の部分を、廣い意味で經濟學に屬するかも知れないが、その核心に觸るることなき部分から區別した。その中心問題は價値學説であり、この學説に彼は經濟學の名を與へた。第二に、彼は經濟科學(economic Science を Economics と區別する名稱の問題が後に提示されるので、ここにこの譯語を使用する)の本質を分析し、さらにそれは嚴密に「實證的」研究であるから、その結論において經濟學者の完全な一致を示さんとした。かかる立場から、ロッビンスは彼の研究を進めたが、彼は決してそれだけで經濟學の全體であるとも考へなかつたし、又よし彼がさう考へたとしても、それが經濟學者すべての考へであるとはいへない。(pp. 199-200)

フレェザァは續いて他の點についてウットンの所説を批判し、「科學」(science)の意義に及び、さらに同夫人の社會主義的偏見を指摘してゐるが、それらについてはここで論及する必要を見ない。「科學」の問題については後に論ずる。兎に角問題を「現實から經濟學が遊ざかつてゐるかどうか」といふことに局限する。フレェザァはウットン夫人を反駁し、「われわれの仕事が現實から離れてゐるから無用であるといふ攻擊に對しては、確乎たる防衛をなし得た」といつてはゐるが、少なくともロッビンスの純粋經濟學については多少なりともこの點を承認してゐるやうに思はれる。それなればこそ彼は最後に經濟學者及びその批評家に對し幾多の提言をなしてゐるのであらう。それならば彼は如何なる提言をなしてゐるのか。今それを論ずる前に、暫く今一つの他の論文に注意を向けなければなら

ない。

フレッザアの「經濟學者と彼等の批評家」と題する上述の論文の掲載された雜誌の同じ號に、ロンドン・スクールのダアビン教授が「研究法――社會諸科學における協同研究に關する抗議」なる一文を發表してゐる。彼はカントの言葉、「內容なき思想は空虛であり、概念なき直觀は盲目である」といふ一句を引用し、理性と觀察の合一に依つてのみ如何なる新しきものも發見されるといひ、現在の經濟學の狀態に言及してゐる。(pp. 183-4)

ダアビンはいふ。理論經濟學の分野においても、又應用經濟學の分野においても、幾多のよき著作が現れてゐる。純粹學說は急激に發展して、複雜變數や數學的記號の不可解の叢林中に入り、他方同時に農業市場、勞働動員、失業保險、行政的知識等は膨大なものになつてゐる。しかもこれら兩者は別々に研究されてゐる。

第一の部門においては、假說に基づき純粹の論理を以つて體系ある理論を立てやうとしてゐる。近世の經濟學にはこの傾向が頗る多いとして、最近の例を三つ擧げてゐる。その中に自分のものをも擧げてゐるのは面白いが、ここに原文のまま借用する。

"We shall assume a community which is wholly engaged in the production of a single homogeneous good, which we shall call Bread. . . . .assume perfect competiton in the market for loans, and consequently in the market for bread" (J. R. Hicks, Economic Journal, Sept. 1935)

" To simplify the problem still further, let us assume in the first instance that there are no contracts enduring for longer than the average period of transaction velocity....." (E. F. M. Durbin, The Problem of Credit Policy, p. 45)

" Let us suppose, for example, a community where the sole product, and also(by a stretch of imagination !) the only finished commodity which its inhabitants buy consists of boots" (M. Dobb, Political Economy and Capitalism, p. 215)

かゝる議論の場合、著者も讀者も、その前提が不十分であり、非現實的であるばかりでなく、眞實ではないのである。その假設は觀察することも、檢證することも出來ないのである。(pp. 184-5)

他方においてダアビンは實際方面の研究が如何なる方面に向ひつゝあるかを示すために、雜誌論文の表題を擧げてゐる。"Recent Changes in the Physical Output of Arable Farms-" " Return to Capital in the Witwatersrand Gold Industry, 1887-1932" "The United States Social Security Act." " Cotton Indices." " Labour Mobility in the Steel Industry." " The Profit of Professional Speculator."

ある經濟學者は經濟學者が抽象的理論ばかりしてゐるといふ攻擊に對して、上述のやうな經驗的な仕事を指摘して辯護してゐる。しかし實際には理論と經驗的勞作との間に何らの關係もないのである。これらの事實の研究は單に事實を說明するに過ぎない。一般的假定の檢證でも證明でもない。この兩者が無關係であることが、經濟學に最も悲しむべき結果を招來したのである。

かくしてダァビンは協同研究を提唱せんとするのである。單に經濟學者相互の間だけでなく、社會諸科學の研究者の協力を求めるのである。（pp. 186-8）

以上フレェザァ及びダァビン兩氏の論ずるところを見れば、兩氏とも何れも現在の經濟學に對して滿足せず、かつその缺陷を認めてゐる。然らば將來經濟學を如何にすべきか。如何なる研究方法を採用すべきかが問題とならざるを得ない。フレェザァのいふA型とB型の經濟學を綜合すべき方法は如何。又ダァビンのいふ理論的學者と經驗的研究者とを協力せしむる方法は如何、先づ次ぎにフレェザァがウットン夫人の說を反駁しつゝ、その結果として提出した諸案を說明しよう。

## 六

ウットンはその著の第六章に「新しき基礎に向つて」と題し、八十頁に亘つて詳細に自己の意見を論述してゐる。今ここにそれらを一々說明する必要はない。彼女が一括して五種類に分けてゐる點を指摘すれば足りよう。

即ち（一）現代の經驗に依る不完全な市場經濟の經濟的分析を現實に適用すること。（二）現存の社會情勢及び動向の研究。（三）近世社會における社會的目的の本質、並びにこれらを形成する手段の研究。（四）社會的目的の充足に關聯する技術的問題の研究。（五）社會改良計畫の試行。（"Lament," pp. 267-8）これらは何れも詳細に說明されてゐるが、それを紹介する必要はない。これをフレェザァの指摘するところと比較すれば甚だ興味多く感ぜられる。

フレェザァはウットンの議論を彼自身の方法で三項目に分かつ。（一）廣義の又やゝ曖昧な意味の經濟學に屬すると當然考へられる具體的な現實的な性質の仕事、（二）同じ種類の仕事で當然經濟學には屬さず、技術論（technology）、社會學、社會心理學及び政治學（これらの言葉の意義も廣義）に屬するもの、（三）ウットン夫人の所謂「社會改良計畫」（plans for social betterment）の三つである。以上について次ぎの諸點が注意される。

（a）ウットンは一再ならず經濟的研究の一片を示唆してゐるが、この型の研究がすでに經濟學者に依つて行なはれたものであることを認めやうとしない。彼女が經濟學の「新基礎」としてなした提案は、單にすでに經濟學者が「現實的」研究のために分析的に放棄したものを再要求するに過ぎない。

（b）社會學や技術論などに全時間（whole-time）的に研究することは出來ない。もしさうすれば最早經濟學者ではない。經濟學者にそれらの問題に專念しないといつて批難することは、恰も癌研究の病理學者に向つて、癌で死ぬ者よりも道路で殺される者が多いからといつて、道路事故の原因を研究せよといふやうなものである。又社會主義的國家では價値問題は完全に解決されるから、均衡理論的分析を放棄せよといふのは、癌研究者に向つて、癌の治療方法が發見され、そして失職するといけないから、道路事故の方に變れといふやうなものだ。

（c）社會改良計畫といふのは、社會研究の計畫を規定し、その結果を評價綜合し、如何にせば社會的厚生に功獻し得るかを示すことであるといふ。それは確かに重要なことである。しかし社會における種々なる團體や階級は社會政策の目的に一致し得ないといふ困難がある。かつ又社會改良計畫の形成は政治的なものである。時には黨派的政治の色彩さへ帶びる。從來のかゝる政治的方面の不協調不一致を反省するならば、ロッビンス教授の非政治的

經濟學を理解することが出來るであらう。（op. cit. pp. 205-7）

フレェザァはウットン夫人の現行經濟學の批難を反駁した後、經濟學者とその批評家との間に次ぎの如き協定をなさんことを求めてゐる。

一、經濟學者は價値學說が經濟研究の唯一の價値ある部門であることを要求もせず、又これを示唆する如何なる方法も採らざること。

二、經濟學者は彼等の學生又は一般公衆のために價値學說を說明するに際し、それから離れて彼等の分析が經濟生活の事實に依つて課せられた制限に注意するやうに强調すること。

三、經濟學者は如何なる奧儀的（esoteric）な意味を以つて「科學」といふ字を使用しないことに同意する。もし情緒的偏見なしにこの言葉を使用し得ないならば、一切これを使用しないこと。

四、經濟學者は彼等の主題は一つの社會研究であり、その目的は社會的厚生を進步せしむることであり、又この目的は他の分野の研究者と合同して研究することに依つて屢〻最もよく實現し得ることなどを繰返し確認する。但し眞理と社會的厚生とに彼自身のなす最善の功獻は純粹の經濟的性質の仕事（分析的であると、演繹的であると、あるひはその兩者を兼ることを問はず）に存することを眞面目に主張する如何なる個々の經濟學者も、迷惑な干涉を受くることなくして、かくの如き研究を追求する特權を有することを條件とする。

五、批評家は經濟學者が何をなしつゝあるか又は何をなさんとしつゝあるかを、彼等の批判を形成又は發表する以前に、確めること。

六、批評家は經濟學者がその好むまゝに彼等の主題を定義する權利を認める。但し（a）かくの如き定義は、もし個〻の研究者にして眞面目に眞理と社會的厚生のために最善なりと信ずるなら、その定義の範圍外に赴くことを妨げるものにあらず、又（b）批評家が（上掲第五條に從つて）經濟學者に依つて經濟研究の種〻なる部門に置かれた重要さに關し、又はかくの如き重要さに變更を加へんとする希望に關し、合理的な示唆を與へることを妨げないことを條件とする。

七、經濟學者及びその批評家は、公衆の面前で經濟研究の地位を不必要に毀損しないやうな方法で議論すべきこと。

八、（裁可）知りつゝ恣にこの協定を冒した經濟學者は非職業的行爲をなしたものと認められ、その仲間の批難を受くるものとす。又知りつゝ恣にこの協定を冒した批評家は無知、讒誣、妨害主義として排斥さるべし（op. cit., pp. 209-210）

フレェザァのこの提案はあまりにもイギリス的ではあるが、兎に角イギリス經濟學界が如何に混亂してゐるかを十分に示唆するものである。この提案について批評する前に、ダァビン敎授に依つて述べられた協同研究について附記して置かう。

ダァビンは前述の如く經濟學內部における理論派と經驗派とが何れも孤立してゐることを批難し、これら兩者の

協同を要求したのであるが、さらに單に經濟學内部ばかりでなく、他の社會諸科學との協同研究をも示唆してゐるのである。その方法としては、具體的問題に關する專門家會議、合同研究室、討論會又は講演、二三の指導者の下における研究生等々、種々指摘してゐるが、その方法の如何を問はず、これを成功せしむる條件としてダァビンは三つの點を指摘してゐる。

（一）抗議は最初穩便なものでなければならない。過去における協同研究は徒らに大きな題目を捕へ、研究者の野心に依つて刺戟されがちであつた。（二）最も效果ある仕事は少數の相互に理解ある專門家に依つてなされるものである。（三）この種の仕事の大部分は報償を受くべきことの三條件を必要としてゐる。（op. cit., p. 195）

## 七

フレェザァ及びダァビン兩教授の論文に興味をもち、ロッビンス教授及びウットン夫人の著作に關聯して、ハンガリィのスラニィーウンガァ教授は「經濟學における事實と目的」と題する論文を同じ "The Economic Journal" の本年四月號に寄稿してゐる。この "Philosophie in der Volksaritschaftslehre" の著者はフレェザァ、ダァビン兩教授の所說に殆ど全面的な贊意を示してゐる。今ここにその說くところの概要を紹介する。

スラニィーウンガァは經濟學が「現實から遠ざかつてゐること」を問題として取上げる。この批難に三種ありとし、第一に一世紀以上以前から歸納派が演繹派を批難するのに、この語を使用してゐる。第二に純粹理論派の論者が相互にこの言葉を用ひて相手を批難してゐる。第三に政治家が經濟問題を處理するに當つて、この言葉に依つて專門家の所說を無視することに使用してゐる。（op. cit., pp. 2-5）

然らば何が故にかゝる狀態を生じたか。勿論彼も從來の經濟學の缺陷であるとして、彼獨自の政策論を展開してゐる。彼は「經濟學の理論と實際的經濟政策とは同一合同體の分かつべからざる成分を形成すべきものである」と主張する。（p. 5）この見地から彼は政治的活動を次ぎの如く分類する。

（一）狹義の政策（Machtpolitik）立法、行政及び司法の大部分を含む。

（二）厚生政策、

（a）文化的又は教育政策、精神的方面の養成。

（b）社會政策、社會的均衡を安定なさしむることに依つて精神的及び物質的厚生の利益を强調する。

（c）經濟政策、物質的厚生の點に重點を置く。

經濟政策に關する詳細の議論は彼の著作 "Weltwirtschafts-politik im Entstehen" にあるが、勿論こゝに示したやうに、單に厚生政策の一部に止まるものではない。それは他の職能を有してゐる。すべての他の政治的活動は經濟政策に依つてそれらの間に供給配布された物質的手段に依存するものである。この第二の職能は財政政策をも包含して、廣義の經濟政策と稱すべきものである。かくしてスラニィーウンガァはこゝに廣狹二つの經濟政策の意義を認め、狹義の經濟政策は自律的（autonomous）であり、それ自體の目的を有する。廣義の經濟政策は他律的（heteronomous）であり、從つて他の目的に依つて決定される。ある產業に保護援助政策を採用するや否やは純粹の經濟的

考慮よりも、社會的、外交的、軍事的考慮に依存すること多きが如きである。（pp. 8-9）

彼がここに政策論をもつて來たのは、經濟學を一部規範的社會科學として認めるからであり、目的論的（teleological）考察をなさんがために外ならない。結局經濟政策の二重性から形而上學的問題へ結びつけ、形而上學的考察は一見現實から離れ、迂遠の如く思はれるが、最後には却つて現實により近き解決を得ることが出來るといふのである。故に彼は「經濟政策のすべての他律性は、事實最後には、形而上學的、倫理的、社會學的考慮に依存する」（p. 11）と斷定するのである。

以上の見解からスラニィーウンガァはダァビンの協同研究案に贊意を表する。かゝる方法に依つて今日まで無視されてゐた極めて必要な現實的見解に、經濟學者は親しむことが出來るとして歡迎してゐる。しかしその實行問題については多少の難點を擧げてゐる。今日專門家はあまりに彼自身の研究問題に專心してその勢力を費してゐるから、その時間を他の專門家との討論に割くことは困難であることがその一つである。第二に方法論的水準が非常に局限されてゐる經濟學者、又現實から遠ざかつてゐる經濟學者が果たして、協同研究に依つて效果を擧げることが出來るかどうかといふ疑問がある。しかし彼は「經濟學に關する限り、かくの如き集成は、もし經濟學者が事實にのみ自ら局限せずして、もつと經濟政策の目的に注意を拂つたならば、最も有效に助長され得るだらう」（p. 12）といつてゐる。

さらにフレェザァの提案に對してはそれになほ三ケ條を增加されんことを希望してゐる。即ち（一）經濟學者は哲學に關する幾分の知識を、その研究の分野において、少なくとも數學を修得すると同樣に重要なものであることに同意する。

（二）經濟學者は少なくとも數年間の實際的經濟生活のある種の訓練があらゆる理論家にとつて甚だ重要で、あるといふことを確認する。かゝる訓練を基礎として理論はより現實的たり得るであらう。

（三）經濟學者は「現實から遠ざかつてゐる」と互に攻擊し合ふ以前に、從來の方法論に關する論爭の文獻を十分に研究すること。（p. 12-3）

以上の如く提言して、彼はその議論を終つてゐるが、このスラニィーウンガァの議論は他のイギリス的な論風に對照して、ドイツ的傾向を附加するものとして、少なくとも私には多大の興味を與へたのである。

## 八

以上私はイギリスにおける經濟學の本質及びその研究方法に關する諸家の議論を大體紹介し得たつもりである。そこには幾多の重要な根本問題が示唆されてゐる。しかし私は今それらのすべてについて意見を述べようとは思つてゐない。それらの議論を通じて共通な點は（ロッビンスを除いて）、現在の經濟學が現實に添はないといふことを概して認めてゐることである。それと共に經濟學が如何なる科學であるかについて諸家の意見の一致してゐないことである。この二つの問題は明かに相互相關聯してゐる問題である。もし經濟學が現實に即してゐると考へられてゐたならば、その科學的性質が如何なるものであつても、一般にこれを問題とする者は極めて少ないであらう。現

在經濟學の科學的性質が多くの人々に依つて問題とされ、しかもその結論が區々であるのは、現實の諸問題を現在の經濟學では把握し得ないと考へ、經濟學をしてこれに適應するやうに再建しようとするからである。

かくの如き狀態を生じたのは、從來の經濟學がその理論構成の基礎としてゐた社會組織に著しい變化を生じたために外ならない。しかしもし現在の經濟學が眞に「科學」たる本質を具備してゐるとすれば、假令その對象たる社會組織に變化を生じたとしても、又假令眼前の事實と相容れない研究の結果を生むだとしても、それは問題とならない。社會事象の諸變化が經濟現象に及ぼす新しい諸影響は同じ視野から研究さるべきであり、又科學の下した判斷が實際現象と相違を生ずることは、如何なる科學と雖も免れ得ないことである。即ち理論と實踐との齟齬は後に述ぶるが如き理由から免れ得ないことである。從つて二個の問題の中で先づ經濟學の科學性について明かにされなければならない。問題は常に古いといふ言葉を想起せざるを得ないが、かつて論ぜられた「經濟學は science なりや art なりや」といふ議論が新しい形で再び取上げられたやうなものである。「科學」といふ言葉は現代人にとつて一種特別の魅力を有してゐる。科學的であるといへば、その內容の眞實性の如何を問はず、正確なるものと考へる風が頗る強い。從つて科學的表現方法を借用して議論をする時には、人々は解ると解らぬとを問ふまでもなく、これを信仰する傾向がある。從つてウットン夫人のいふが如き批難も出來、又フレッザア敎授の如く「科學」といふ言葉の濫用を防止せんとする提案も生ずるのである。このことは現在の經濟學が眞に「科學」たる名に相應するものであるならば、問題は起らない筈である。勿論「科學」の限界を認めず、これを濫りに信仰することから生ずる弊害は別問題であるが、現在の經濟學が科學たる性質を十分に具備してゐるとすれば、科學としてこれを信仰しても一向差支は生じない。前述の如き批難や提案の生ずるのは、現在の經濟學は科學的性質を十分具備してゐないといふ前提から生ずる。從つて次ぎのやうな意見さへ起る。「かつ "economic science" といふ言葉を使用することが增加し、そしてより穩和な "economics" にうまく代つて使用されてゆくやうに思はれる。恰も "economics" が一代前にその前驅者である "political economy" を追出したやうに。そして理論經濟學者に依つて彼等の研究に對し "science" といふ言葉の一般的適用が增大するといふことの中には願望を滿たしたいといふある要素があると思ふ。何故ならば自然科學の研究者は常に互に甚だしい阿諛的言辭に引用しない。それに反して彼等は一體となつて經濟學者の運命を、われわれが屢〻見出す一般公衆の侮蔑から少なくとも免れしめんとするからである」（Wootton, op. cit., p. 112）しかし社會主義者であるウットン夫人のこの言葉はわれわれにかつて廣く使用された「科學的社會主義」なる言葉を想起せしめ、一笑せしむるに過ぎないものであるが、現在の經濟學が科學たらんとして、未だ十分に科學たり得ざることは認めざるを得ない。

經濟學は科學たり得るや。この問題はあまりに大きな問題で、ここで十分に說明することは出來ないが、私は經濟學は嚴密な意味で科學たり得るものと思つてゐる。しかし經濟學が科學たり得ずして一つの技術論に過ぎないとしてもその重要さには變化がない。唯私は大體ロッビンス敎授の所說の如く嚴密な科學となり得ると考へる者である。但し經濟學がロッビンスのいふが如き性質を採るかどうかは別問題である。唯ロッビンスと、經濟學を客觀的

な、實證的な、普遍的な科學たらしめんとする方法を採用する點において一致するのである。（なほ科學そのものの意義については、拙著「歴史と科學」一四〇頁以下參照）。現在の經濟學が科學として不十分であるとすれば、それは科學として十分の精錬を經てゐないか、又は科學としての素材に、（例へば統計その他に）缺陷があるからであらう。この點においてはビヴァリッヂ（Sir William Beveridge）の議論に贊成する。しかし彼の如く「社會諸科學は事實未だ成長し切つて居らぬ。社會諸科學は今日の自然科學でなく、その最初である四百年前の自然科學を考慮することに依つて、鳥瞰圖的に最もよく觀察される」（"The Place of the Social Sciences," p. 478）といふのにはあまり贊意を表しかねる。今日の經濟學は科學的に精確なものとはいへないが、その科學發達の段階にあつてはすでに相當發達したものと見てよい。

經濟學が發展して科學的性質を強むれば強むるほど、その規範科學たると實證科學たるとを問はず、科學としての限界はこれを認めざるを得ない。ロッビンスが經濟法則の限界を正確に記述せんとしたのは當然である。（op. cit., pp. 126 ff.）この意味で經濟學が現實から遠ざかつてゐるのなら、それは誠に止むを得ぬことである。如何なる科學でも、それが科學と名づけ得るほどのものならば、その法則なり、豫測なりが、現實に個別に生じた現象と同じでないことは、自明のことである。現實に、個別に生じた諸現象は如何なるものといへども、唯一つの科學的法則が作用するものでないからである。この意味では如何なる理論も實踐性を有し得ない。

## 九

以上の記述は社會諸科學、殊に經濟學の最近の動向に反するものかも知れない。第一にわが國において近頃唱へられてゐる日本經濟學といふ意味が他の國に對しては妥當性を有さぬ特殊のものとするならば、それはここにいふ經濟學とは別個のものである。小泉信三博士の言を借用すれば、廣義の經濟學、即ち國籍なき經濟學を意味し、狹義の經濟學、即ち國籍ある經濟學は包含されない。（「時局と經濟學」三田評論昭和十四年一月號所載）國籍ある經濟學とは、「科學」としての經濟學に基礎を置いてある特殊地域に關する經濟論に過ぎないであらう。勿論それが重要でないといふのではない。嚴密な科學として成立し得ないといふだけである。そして科學ならざるものと雖も決して輕視すべきものではない。

第二に最近における經濟學の傾向は前述のイギリスの場合においても見られるやうに、經濟外の諸現象を取容れんとしてゐる。勿論經濟外の現象と雖も、（經濟的とは何かといふ問題は暫く別として）、經濟的なるものに影響を及ぼす範圍及び重要さに依つて考慮すべきことはいふまでもない。しかしそれらは常に考慮する以上に出づることは出來ない。ceteris paribus はすべての科學的理論に必要な假設である。唯經濟學においてのみ、この點が特に批難されてゐる。

唯ここに注意すべきことは、假令經濟學が科學として極めて純正なるものとなつたとしても、その對象たる人間の經濟行爲は一つの歴史的、集團的なものであることである。從つてこれらを把握し、理解するためには、時間的に全體的になされなければならない。ハロッドは（一）靜的經濟學（價値及び分配學說）、（二）動的經濟學、（三）經驗

的研究（Empirical Studies）とし、第三を以つて將來最も重要にならうといつてゐるが（"Scope and Method of Economic"）、そこに動的又は經驗的研究といふのは、單に現實から離れてゐるといふ批難に對する辯解とより思へない。單に個人的な「經濟人」の欲望充足から出發するのでなく、人類の經濟的發展を前提として理論を成立せしる必要がある。

この議論は一見前述の經濟學の科學としての限界と矛盾するかの如く思はれるかも知れない。經濟學の對象をロッビンスのやうに議論を最も客觀的ならしめんとして稀少性に置き、稀少の質的分子を絶對的性質のものでないとして、需要との關係における制限としても、（p. 46）その需要の重要性を理解するためには、その時代の社會の本質を把握しなければならない。この意味で經濟學者は哲學を學ぶべしとするスラニィーウンガァの提言には贊意を表する。しかし彼が經濟學者は數年間實務生活に從事せよといふのは愚論である。實務生活に經驗があることは明かになきに優る。しかし實務生活に經驗ある者が必ずしも實務生活の正しき理解者であるとはいへない。否却つてある時期のある特殊の實務に經驗あることが全體としての實務生活の正解の妨げとなることを少なしとしない。

ダァビンの協同研究もこの意味において贊成である。經濟理論家が――即ち純粹な經濟學を研究する者が經濟史的事實をその素材として取上げるやうな場合に、すでに經濟史家の間では誤謬として棄て去られたやうなものを素材とすることは正しいといへない。從つてある時代の社會現象を出來る限り正確に把握するためには、多くの專門家の援助を必要とする。この意味でダァビンの提案は、スラニィーウンガァの指摘するが如き種々なる困難があつても、なほ實現し得るやうに、すべての社會科學研究者の協力すべきことであらう。

要するに理論はそのまゝでは實踐的ではない。經濟學は科學として確立すればするほどこの意味の實踐とは遠ざかるであらう。從つてそのまゝでは實際に役に立たないし、又一般人には理解し得ないものとなるであらう。しかしそれにも拘らずその時代の社會生活を十分に把握し、理解してなされた科學としての經濟學は現實生活の經濟現象に對する判斷に指導的な基本力を有するであらう。そしてその專門的術語を以つて――時に數學的表式に依ることもあらうが――表現された經濟學は實際家に對して指針を與へ得る。この意味において經濟學は――廣くいへばその理論は實踐性を有するといへるのである。唯社會現象は綜合的である。經濟現象だけが單獨に作用するものではない。同じ病人に對して醫者の判斷が同一でないと同樣に、經濟學者の判斷も必ずしも同じとはいへない。それだからといつて經濟學研究の鼎の輕重を云々することは出來ない。

次ぎにスラニィーウンガァの經濟政策論について一言して置く。經濟學を上述の如きものとすれば、經濟政策は經濟學ではない。又彼のいふが如く、自律的な經濟政策なるものはない。經濟政策は一つの權力の表現としての政策の一種である。從つて如何なる場合でも、程度の差はあるかも知れないが、他律的である。政策そのものが綜合的なものである以上、その一分岐である經濟政策はその綜合的な目的に依つて律せられざるを得ない。（政策學の成立如何は暫く別問題とする）。自律的な經濟政策は結局技術論の範圍を出ないであらう。技術論（technologies）の問題を說明すべきであるかも知れないが、こゝでは省略させてもらう。ロッビンスの「經濟學と技術論」の一項は興

味多い議論であるから、(op. cit., pp. 32 ff.)參照されたい。

最後にロッビンスの經濟史の定義について附記して置きたい。彼はその經濟學に對する定義から當然經濟史を以つて稀少性に關係あるものに限定せんとする。即ち「經濟史はこれら(稀少性)の關係が時間を通じて現れた實際の例を研究するものである」(p. 38)といふ。稀少性の歴史的説明だといふのである。しかしこれは歴史の本質を理解しない言葉である。歴史は一つの綜合的現象である。彼は宗教改革の例を採つて次ぎの如くいふ。

「宗教史家の見地から、宗教改革は教義並びに宗教組織に與へたその影響の意義である。政治史家の見地からは、その興味はそれが惹起した政治組織の變化、支配者と臣民との新しき關係、國民的國家の發生である。……しかし經濟史家にとつては主として財産の分配における變化、貿易路の變化、魚類に對する需要の變化、免罪符の供給の變化、租税負擔の變化などが意味がある。經濟史家は目的の變化、手段の變化それら自體には關心を有たない。彼は彼が研究すべき手段と目的との關係の系列に、それらが影響する限りにおいてのみ關心を有する」(p. 40)

經濟史が歴史の一種である限り、その對象たる經濟現象を他から全然切離つことは困難である。勿論ロッビンスといへども、機械的にそれぞれの現象を切離ち得ると考へたわけではないやうであるが、彼の示す定義に依れば歴史現象に對する無理解を現はしてゐる。尤も彼は屢々"Economic History and what is sometimes called Descriptive Economics" とか "in the field of Descriptive Economics ——the Economic History of the present day" とかいつてゐるのを見ても、彼の概念は本來の歴史といふ概念とは大分隔りがあるやうである。なほ歴史の意義については前掲拙著を參照されたい。

以上私はイギリスにおけるの最近經濟學に關する論爭を紹介し、それらについて多少の批判を試みたのである。從つて私自身のこれらの問題に對する建設的記述は敢て試みなかつた。それは未だ私自身の内に十分成熟してゐないからである。從つて述べんと欲して述べ得ざりし點、述ぶべくして述べざりし點も少なくなかつたと思ふ。特に讀者の寛恕を乞ふ次第である。

（昭和十四年七月廿五日稿）